季寄註解　改正月令博物筌

正月　第一

特1
2961

ガラス使用

特1
2961

改正
月令博物筌
冬之部

十月部目錄

△印ハ俳偕の季をりの物あり

養生の法。雨風の考へ。氷の豊凶。妙藥其外人家重宝の事ハ取々出す皆目録にハ志るさず

發端 冬の由來 冬の異名 發一丁
十月 卦 陰陽生 月建 調子 異名 十一丁
△立冬節 十三丁
△小雪 節ハ 十六日 十三丁

十月令

此部ハ十月日の定アる事支の定アる事を集めあるなり

朔日 △孟冬の旬 十四丁
△更衣 十四丁
朔日 衣服の式 十四丁
朔日 △拝墳 十四丁
朔日 △進炉炭 十四丁
朔日 △熾燗食 十四丁
朔日 △炉開 △爐火會 炉開會 十四丁
△神送 △神の旅 △神の留守 十五丁
亥日 △御玄猪 △玄猪餅 △亥の子 △御嚴重 ○能勢餅 十五丁
五日 △達磨忌 十五丁
△殘菊宴 十六丁
△十夜 十六丁
六日 △大和興福寺法花會 十六丁

十日 △讃州金毘羅祭 六丁オ
十二日 △芭蕉忌 七丁オ
中亥 △水官解厄 七丁オ
中亥 △出雲大社神事 △神あつめ △神おくり 七丁オ
十六日 △京都聖一國師忌 七丁オ
廿五日 △京法勝寺大乗會 八丁オ
晦日 △神迎 八丁オ

十日 △南都維摩會 六丁オ
十三日 △御命講 △法花會式 七丁オ
十五日 △下元 七丁オ
廿日 △恵比須講 △誓文拂 七丁オ
廿八日 △梅尾虫供養 八丁オ

十月月令

此部には日の定まれる十月一ヶ月の事をあつむ

△御取越 八丁オ
△茶の口切 △口切 八丁オ
△巨燵明 △巨燵切 八丁オ

十月時令

此部には十月の時候にかゝる事をあつむ

△初冬 八丁オ
△初霜 △初霜きゆる 九丁オ
△時雨 △初しぐれ △川音時雨 △袖しぐれ △小夜時雨 △村しぐれ △北しぐれ
△片しぐれ △涙しぐれ △夕しぐれ △松風しぐれ △落葉しぐれ 九丁ウ
△志ぐれ 十丁ウ
△木枯 十丁オ
△初雪 △初雪きゆる △初雪の見参 十一丁ウ
△初氷 △初氷解 十一丁ウ
△冬ざれ 十一丁ウ
△冬籠 十一丁ウ
△冬構 十一丁ウ
△閉北窓（図） 十一丁ウ

草木

此部には十月の草木を集めたるを

△名草枯 △蘆かるゝ △葛かるゝ △薄かるゝ △荻かるゝ △芭蕉かるゝ △蓮かるゝ 十二丁オ
△冬椿 十二丁オ
△早咲椿 十二丁オ
△残菊 十二丁オ
△冬牡丹 △寒牡丹 十二丁ウ
△石蕗花 十二丁ウ
△冬菊 △寒菊（図） 十二丁オ
△水仙花 十三丁ウ
△八手花 十三丁ウ
△茶の花 十三丁ウ
△山茶花 十三丁ウ
△帰花 △かへり咲 △わすれ咲 十三丁オ
△寒梅（図） 十三丁ウ
△枇杷花 十三丁ウ
△室の梅 △室咲 十三丁オ
△樝の花 十三丁ウ
△散紅葉 △紅葉散 十四丁ウ

△參壽（むぎまき）　[illegible]
△枯蘆（かれあし）　[illegible]
圖　△枯柳（かれやなぎ）　[illegible]
圖　△落葉（おちば）　[illegible]
△木の葉（このは）（[illegible]）　[illegible]
圖　△木葉の[illegible]（[illegible]）　[illegible]
△朽葉（くちば）　[illegible]
圖　△[illegible]　[illegible]
△大根（だいこん）（△大根引　△おほね）　[illegible]
△冬木の櫻（ふゆきのさくら）　[illegible]
△雪の下（ゆきのした）　[illegible]
△枇杷の花（びわのはな）　[illegible]

生類

爰ハ十月の鳥けだもの魚虫のるいをあつめたるなり

鶯子啼（うぐひすのこなく）　[illegible]

必用

此部ハ十月一ヶ月の天氣乃見やう其外必用の事をのせ

破軍旬方（はぐんしゅんぼう）　[illegible]
日刻（ちうこく）　[illegible]
出行作事（でゆくさくじ）　[illegible]
樂事（らくじ）　[illegible]
天氣（てんき）　[illegible]
占候（せんこう）　[illegible]
養生（やうじやう）　[illegible]
衣服（いふく）　[illegible]

生花式[illegible]

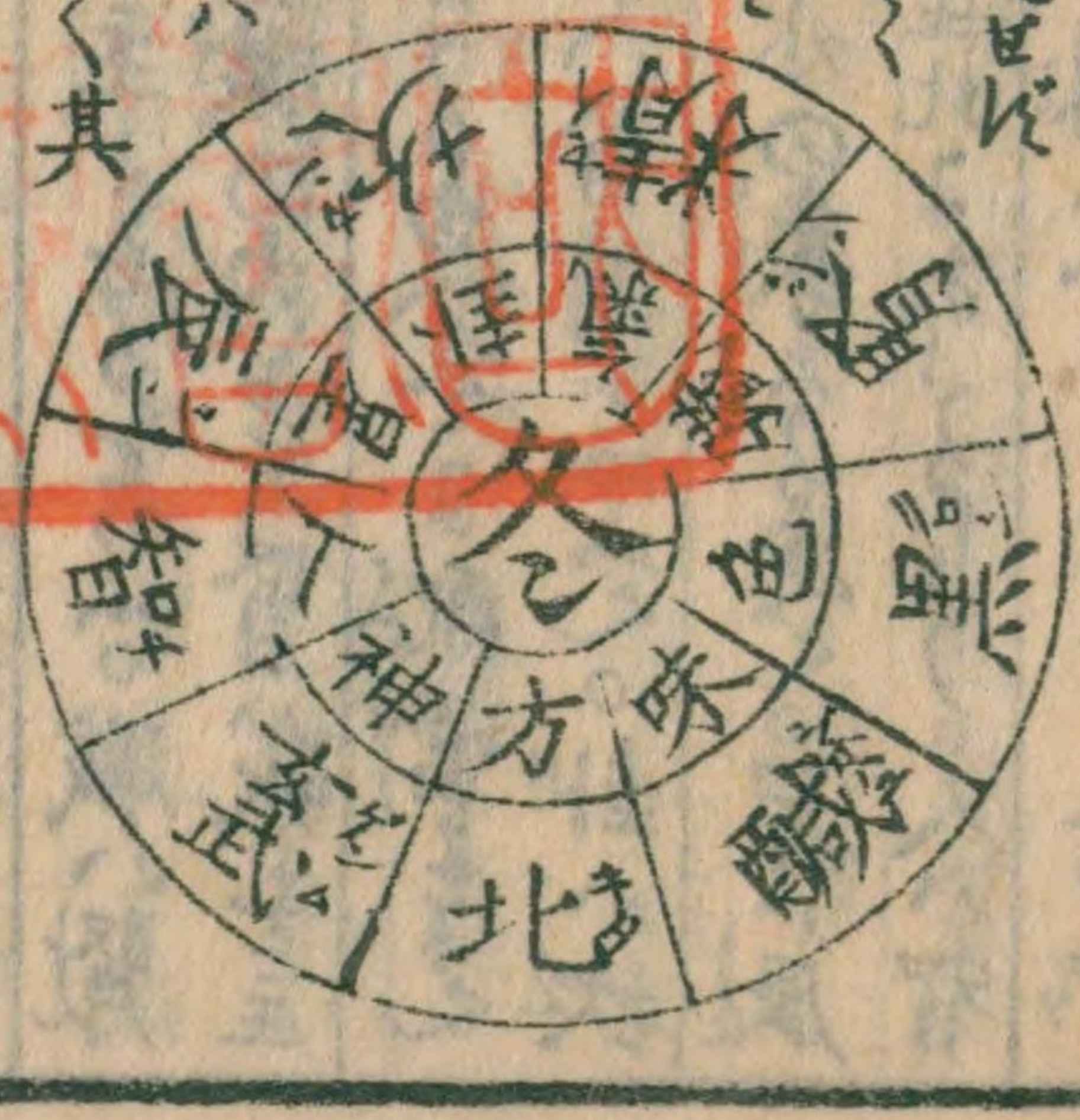
[illegible]　料理獻立（れうりこんだて）　終

十月ノ部目錄終

月令博物筌冬の部發端

丸き内に書するハ冬の氣の旺する所

月令に曰天氣上り騰り地氣下り降る天地通せず閉塞して冬となるといへり註に天氣上り騰り地氣下り降るハ天地わかれて其位を正しうするをいへり猶委しきことハ爲主といへる所にあり



冬由來（ふゆのゆらい） 釋名に曰冬ハ終也萬物終る成る所以を有これハ冬ハ一年の終にてよろづの物成就するといふ事也。和語に曰冬をふゆと訓ぜしハひゆといふ事ならんといふ五音相通ずるなり

冬爲主（ふゆあるじとする） 方ハ北といふハ易の統圖に曰日冬ハ北方の黒道を行

これを北陸といふと有よつて北を冬の方とするなり。味ハ醎をつかさどる事ハ冬その氣ハ水に屬するゆへ海水の塩からきを味とするなり。色を黒しとハ月令に天子玄堂の左个に居り玄路にのり鐵驪に駕し玄旂を載黒衣をきると有く玄堂ハ北の方の堂をいふ玄路ハ黒き車鐵驪ハくろむま也事玄旂ハくろきはたの事にて如此く黒色を主とするをいふ。臓ハ腎とハ人の五臓の内にて腎ハ水を主どる臓なるゆへ冬に配當するなり氣ハ精とハ腎精をいふなり。卦ハ坎とハ坎ハ水の象なるゆへなり。星ハ辰とハ辰星北にあらはるなり。人ハ智とハ腎ハ閉蔵の官にて人の智恵をかくす臓なるゆへ智ハ冬に當るなり。神ハ玄武といふこれも黒きかたちを以て冬の神とするなり

冬異名

。玄英。顓頊。玄冥。上天。清冬。三冬。九冬

（和名）。こるつ月。くるゝ月。きなつけ

異名註

。玄英といふハ（爾雅に出）爾雅の註に曰氣黒くして清英なるといへり。顓頊を禮記に其帝ハ顓頊と有。玄冥ハこれも禮記に其神ハ玄冥と有。上天とハ禮記に天氣上騰ると有をいふ。三冬ハ東方朔の疏に出たる字にて冬三月の事をいふ。九冬ハ元帝纂要に冬を玄冬九冬といふ。清冬ハ皮日休が詩に冬を清冬と作れり。こるつ月ハ八雲御鈔に出て雪氷あれども露の事あるよりなれるものあまた冬をこるつ月といふなり。くるゝ月ハ拾遺集に出て三冬つきぬらしきぬれバとよみて漢土に三冬といふに同じ心也

ガラス使用

哥 秘蔵　きなつけ　小野峯雄

きなつけとなづむる木ハ八重に茂立田れ山をゑとももめちなくれ

夫木　為相

波ゆるき入江の蘭まつくく路月れそろぞ冬のかげなき

俳 名書をおしむ陰は冬ごもり　支考

ゆなびつ

○冬の朝の事之

哥 蔵玉集

ゆくらよおきてつれされバ白雪乃庭もえくられ路まけさのれ

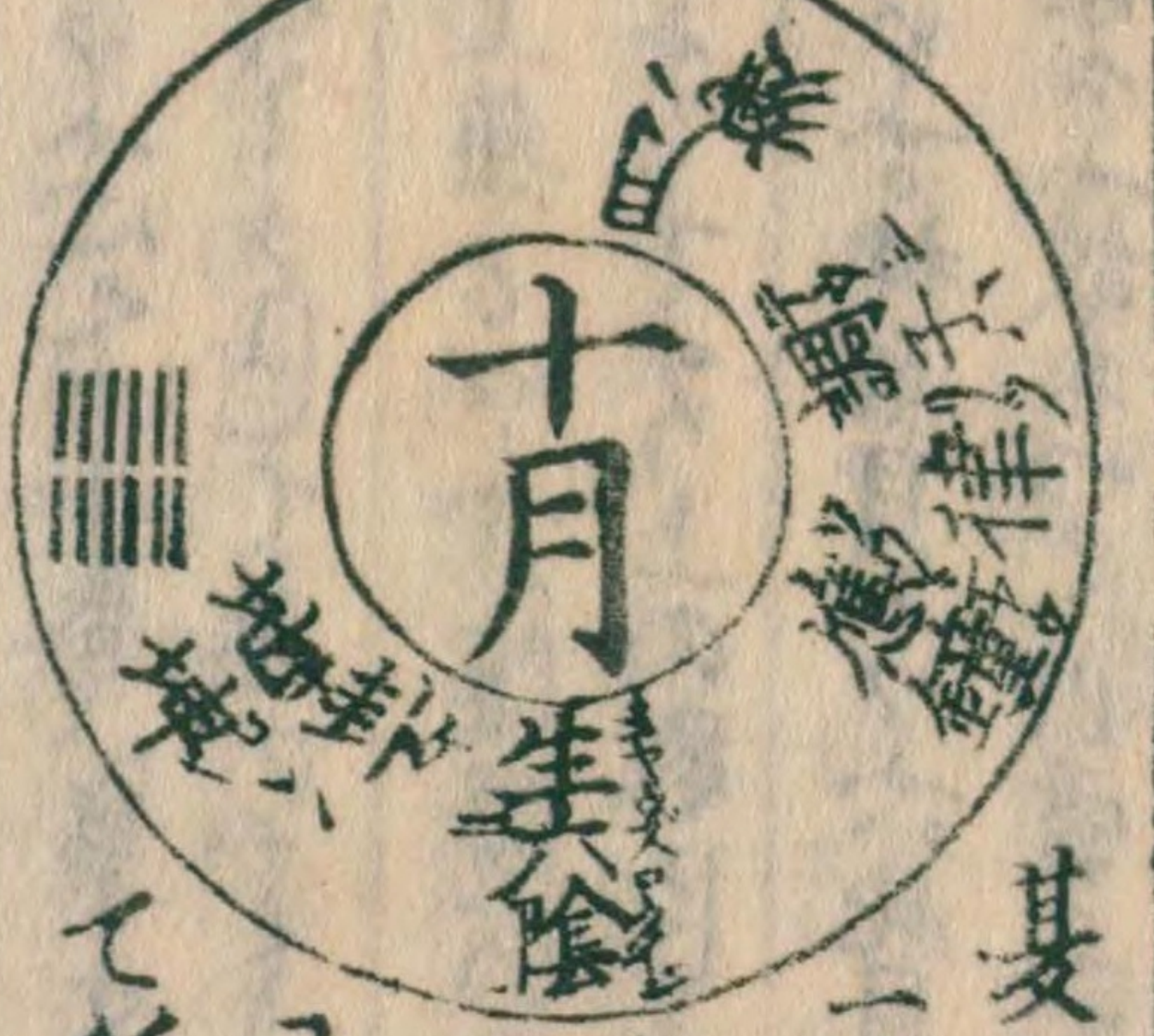
らけこえめ

○冬を主る神之妻の神を佐保姫といひ夏の神をつゝ姫といひ秋を龍田姫といふいづれも童蒙抄ニ出たり春姫ハ俳の季に用ゆる也へもふれ委しく註にせずも神祇あれハ四季の気を主る造化の神にて擬に名付るぞ

○右の外三季ふまくる季節ハ其のハ別ニ三冬の部有

十月の部

△印を記に分ハ季をもつ物之



夏至ニ生じる一陰の上ニ月々にましく一陰づゝ加りて十月ニ八六陰となりて純陰の月之

○調子ハ律ニして應鐘といひ六ハ水の盛長しるる之ト禮記月令ニ出應ハ陽ニ應ずるなり鐘ハ動くといひ心ニて萬物動きうるる之

○卦ハ地坤とて六上の圖のごとく極陰ニて地のうるる之

十月異名

△上冬○陽月○良月△孟冬○開冬○玄冬○秦正○小春△初冬

俳△神無月 神なら月△神有月

△志ぐれ月○上冬△初冬月

△初霜月△小六月△こぞ陽

異名註。陽月とハ此月一陽をしめてきざすをいふ事爾雅に出たり。良月ハ左傳に出づるより十ハ數の滿る事を良といふより。左傳の注に見えたり。孟冬ハ月令に出ははじめの冬といふ義也。上冬ハ纂要に出これもはじめの冬といふ事也。開冬とハ顔延之の詩に作れり冬のこゝちといふ事也。玄冬これも纂要に出てはじめの冬也。秦正ハ歲時記に出秦の世の正月にあたる月といふ心也。小春ハ事文類聚に十月のあたゝかにして春のごときをいふとあり。上無といふハ陰陽の數の下よりかぞへて十より上の數なしによつて此月を上無といふ。神無月といふハ此月神々出雲國に集るゆゑ故名づく出雲にてハ神有月といふ又一説に此月の異名上無といふを俗誤つて神無月といへるとも

。又眞淵の説にハ此月雷聲を出さゞる也雷無月といふといへり。此月伊弉冊尊崩じたまふ月ゆゑ名づくと世間問答に出たり。貝原氏の説にハ卦におゐてハ坤として純陰にあれバ陽未復陽なきの月也神ハ陽の司也此月陽なきの月也神無月といふ諸神出雲にあつまりたまふなどいへるハ跡かたもなき事とあり其外説多し委しく日本歲時記に志るしたれバ然れども風雅の道にハ此論に不拘神なき心をよむも風情ありてよし次に證哥を出し作例と次

㊀秘藏　神なき月　菅原忠音

よもとやまハかつこれるやなかりけり
しぐれひまなき神なき月

莫傳　神なき月

雲ゝある松の本まれまれおとハ
神なき月と何をいひきまし

千載　神無月　道因法師

あらし吹ひらのたかねのねわたしに
あはれ時雨る神無月かな

新古今　神無月　高光

神な月風にもみぢのちる時ハ
そこはかとなくものぞかなしき

俳 神無月摩耶詣の日に本のまこゝろ　野水

十月ハ小春の不二見へかゝり　支考

神無月髪奉へまさむいかりの國十
婦曾んやたしらまする神無月　支考

歌 藏王　しぐれ月

ちりもてゝこのもの濡のしぐれ月
冬れもとじめよ何をそかまし

同　[illegible]月

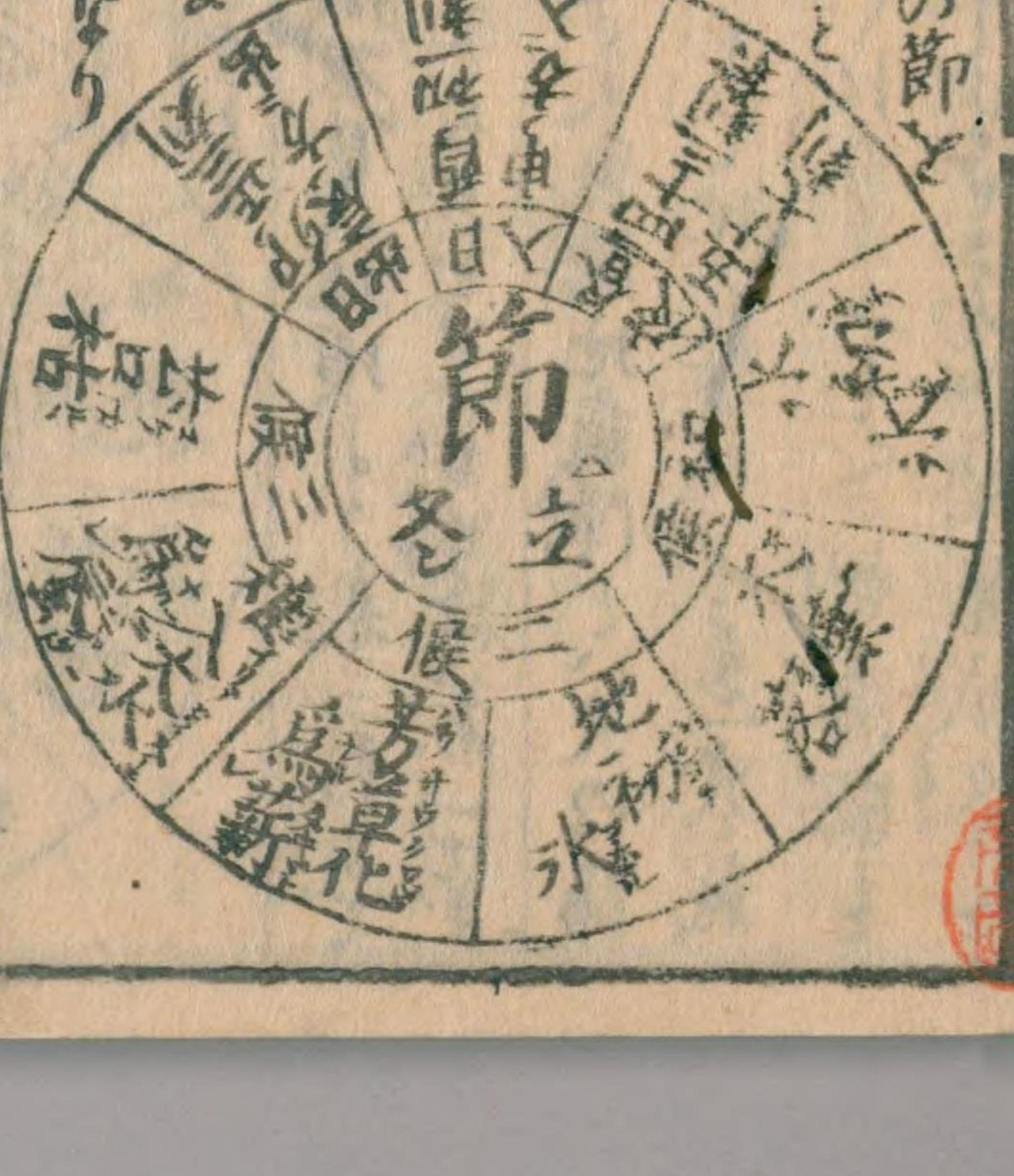
草も木も初ゐ月のおぼろけ
なかわも白きけさのそらうさ

俳 鶺鴒の尾をやすまする小春かな　后女

尾かりもぬくもりふ来る小春かな　人男

立冬　○節の意○七十二候○物來七十二候
晝夜長短○日の出入左に記次

十月の節を立冬といふハ冬れとはじめの節なるまバなり



○此頃水始て氷る。木の葉落散うるとく。地始て氷とハはじめに水が氷りてそれよりだんだん地もいてるといふ事也。○芳草爲薪とハよき花ひの有し秋草もかれしぼれたるをいふ也。○雉入大水爲蜃（きじおほみづに入てはまぐりとなる）月令の注に蜃ハ蛟のるいにてしかれどもふかきものもひそまるもののふるうつるとりふこゝろぞ。○苔枯ハ草木ばかりならずわらべ苔までが枯るといふ事なり。

歌 千載　さまざまの草ぞもとハおかれ
ぬれどもよりもやまさきぬらん

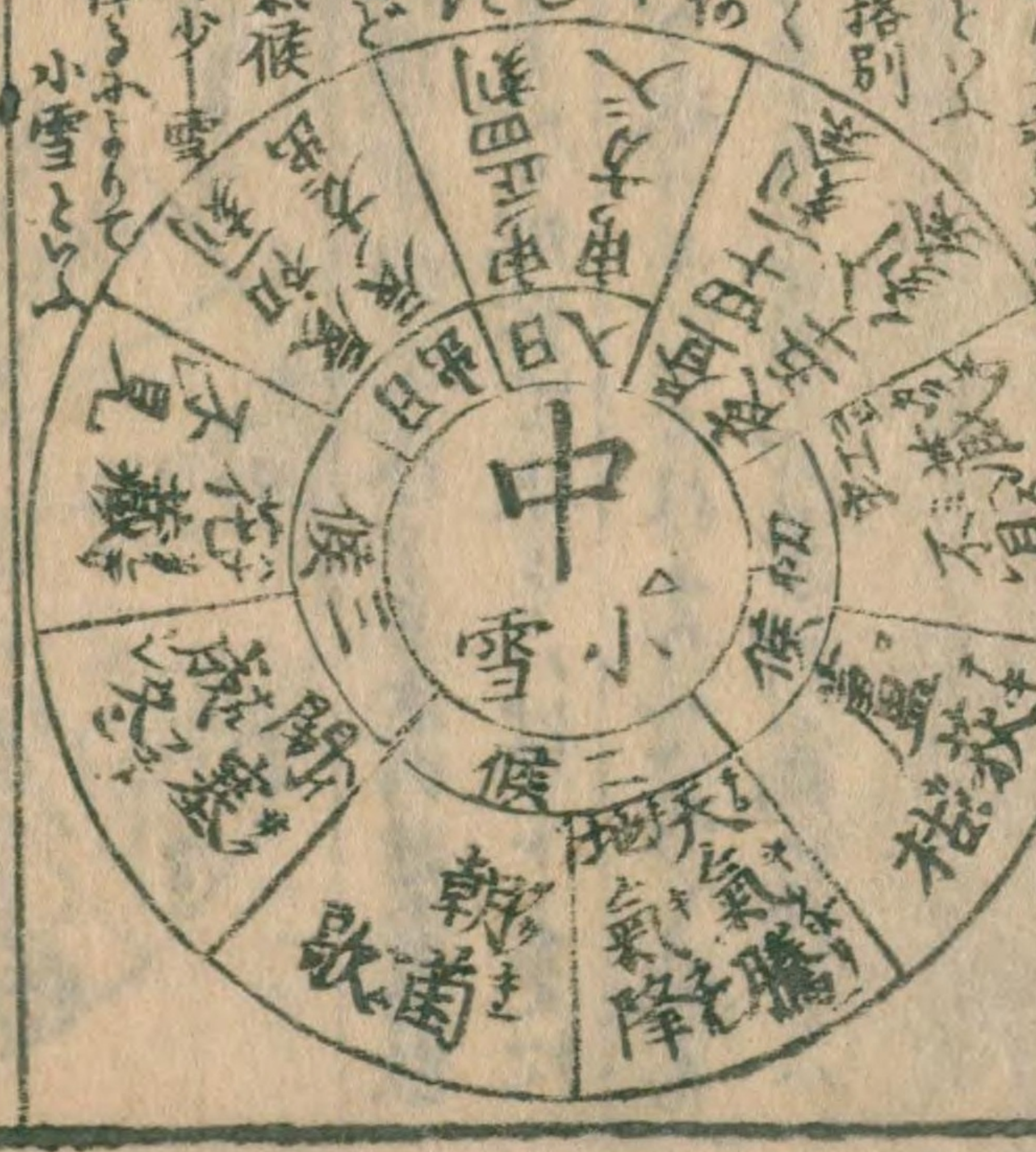
節の占候

立冬の日土ふあくれバ来年麦貴し田耕宜からず壬子なれバ来年大ふ熟し節の日晴れバ来春雨多し北風あれバ六畜ふさいハひあり

小雪

○中の名也○七十二候○艸木七十二候（日出入○昼夜長短○左ニ記ス）

節より十五日めを小雪といふ此頃格別さむくもなけれどたゞうすゆきもふれバ中ほどの氣候まで少し雪も降るによりて小雪といふ



○虹藏不見ハ此頃より来三月まで虹[illegible]といふ○蘆荻枯ハあしをぎ枯るゝ也○天氣騰地氣降とハ天の陽氣去りて地の陰氣下る也寒氣ぜん〴〵にりよふもる也○朝菌歇をきのこ生ぜざる也○閉塞成冬をハ陽氣ふさがりて寒き冬となるなり○花藏不見ハ花ハ大抵陽氣を得てひらくものゆへ陽氣なき時なれバかくれて不見なり

日令

此部ハ八日の定まる事并ニ支の定まる事を出ス

朔日 ○今日沐浴をなし長壽にいたる

朔日 ○今日房事を[illegible]につゝしむべし

朔日 △孟冬の旬 今日天子御装束を改めらるゝて南殿に出御なりて節會行ハるゝ二献の後氷魚を群臣にたまふ（公事根元ニ出）

㊂ 元弘立后屏風

治れる御代の貢とよろひまで大宮人まゐるなり

㊑ 初霜冬にいへど名細の袂　也有

朔日 △更衣 十月朔日ハ先づ御衣並に掃部寮夏の御装束を撤して冬のに改めらる○天皇南殿に出御ありて節會行ハるゝ是を孟

ガラス使用

冬の旬といふ。衣更とばかりハ夏ハ四月也

（俳）酒なきハ袖と散げり更衣　李下

朔日　衣服の式　諸家今日より来年三月晦日迄冬の袍を着せらる（紀事に出づ）

朔日　△拝墳　唐土にて今日貴賤ともに先祖の墳を拝し祭をいふ　貢原
説ニ本朝にても今日先祖を祭るべしといへり唐日本の祭かはり委しく（歳時記ニ出）

朔日　△進爐炭を奉る事　唐土ハ今日有司爐ニ燎炭を奉る（事文類聚ニ出）

朔日　△燋糟食ふ。唐人十月朔日多く蒸裏を作て節物とす。荊楚の人多く燋糟を食ひ或ハ糖と為す　事文類聚ニ出　燋糟とハ酒の滓のこかしたるやうな物也　又燋糟の事ハ蒸裏　是もつふ蒸裏とハつゝみてむしたる物をいふ

朔日　△爐開　△煖炉會　△炉開會　今日炉を開き三月廿日炉をふさぐ
唐土にて今日炉を開き炉中にて肉をあぶり飲食し是をだんろ會といふ（歳時雑記）

此例より本朝茶家ハ此日より炉を開き賓客に茶を喫しむ　（詩）有　歳時記ニ出

△神送　△神の旅　△神の留守。此日諸神出雲の大社へ臨幸し給ふといへり　委しくハ日本歳時記に出たり面白き事ども見るべし

（俳）留守のまに荒たる神の落葉哉　野水
かつらきの神ハ寝深き旅出立　蘇守

（狂）馬なくて風をバ神のかしま立　木の葉さハぐ音そひて行　真魚

亥日　△御玄猪　△玄猪餅　△御厳重　△亥の子　△能勢餅
昔ハ山猪を奉る事（日本記等ニ出）○應神天皇の御代より毎歳亥の月亥の日を祝ひて其日御玄猪の餅を奉るべき詔ありて攝州能勢郡木代村切畑村両村より貢之。餅を製する當家ハ能く清め赤小豆と餅米とにて餅としきくの花なりで

かの木の花葉をかいしきとし色うす赤しこれハ家の子れ肉祝表しけるなり○下學集ニ曰豕ハ象年ニ十二子を生む閏年ニハ十三子を生む故ニ婦人これを祝ふといへりされバ童謡ニ亥よ子のもちハ親ならぬ子うめといふハ此故あるか○十月亥の日ニ餅を食へバ無病長生なり朝鮮其外委しくハ歳時記拾遺ニ出たり女の祝ニすけなど甚面白し見るべし

㊂ 蜻蛉日記 万代をいのりて山里のいのこのもちをつくるよそひまで」

㊇ 祢き女の顔もるおつく亥子餅 立甫

「今朝あけし亥猪の上のもちゐ 時風

㊄ 隣舎 となりしまうよびれふきてありしがさてもいのこの眼れ亥ごく 貞松

上巳 今日槐の実を食すれバ百病除く

四不成 凶就日 今日房事を慎べし

五日 △ 達磨忌（だるまき） 達磨ハ南天竺の人薫の菓ニ果てゆろしなり禪宗を弘む大和十九年十月五日寂ス委しくハ博物筌ニ出タり

㊇ 禅寺るニ達磨忌や惜者 寛人

「達磨忌や庵ハ……ニ ⊡ 李破

㊄ 小庭木のかきつゝけるもかげぬそらかゞてさびく書ちる 貞卿

△ 残菊宴（ざんぎくのゑん） 延喜の御代十月残菊の宴をもよほしたまう

㊂ 秋さける菊ニはあれど神無月時雨ニ花のいろハうつりける 貫之

㊆ それまいの花ハ葉も菊の匂ひ 昌休

㊇ 香そへて延くおもよハひや菊の宴 嵐雪

㊄ 秋をまよこ綿をつらねさてつくとむりうしそうれ残菊の宴 秀貞

△ 十夜（じうや） 此月毎年六日より十五日まで浄土宗の諸寺ニて會式（ゑしき）を勤むるなり

㊇ ほ足袋の香こゑニ薫る十夜かな 白羽

「いろきぬニ吉田ハ吉田十夜かな 李里

㊄ ゑのんくとおもひをたゝけど倉きき百万遍の御の渡りかさん 松子

六日 大和 △**興福寺法華會**（こうふくじほつけゑ） 一名山階寺（やましなでら）といふ九月晦日より十月六日まで妙法の大會をおこさしむ此大會ハ閑院（かんゐん）冬嗣公初めハ十六日ハ冬嗣公父長岡大臣の御忌日にあたる也其為行ハるゝとや

十日 讃州 △**金毘羅祭**（こんぴらまつり） 讃州鵜足郡象頭山に神代より御鎮座ある神之御神事八月晦日より初まり十月十日終る今日參詣別して多し故に著されし金毘羅道中記といへる本あり此本ハ金毘羅參詣海陸の道中を委く記し其余御利生縁記哥等まで委しくのせ

十日 南都 △**維摩會**（ゆいまゑ） 南都興福寺に十日より十六日迄行ハるゝ

㊅哥 白川殿七百首　新大納言顯輔

維る月阿海ゑおりける法とそて
ありし昔にのこる名乃み乎

㊅俳 維摩會やいねかりのあとのむし　尾霜

十二日 武蔵 △**芭蕉忌**（ばせをき） 俗姓松尾氏初の名ハ半七後に忠左衛門宗房と改俳諧を季吟に學び桃青といふ江戸深川の庵に芭蕉一株を植おく是によつて世の人芭蕉の翁とよべり尤俳偕中興の祖なり

十三日 △**御命講**（おめいかう） △法花會式ともいふ日蓮上人今日寂れ故に法花宗寺院におゐて御影供（みえいく）を修する○みえいくとなまりて云俗に御の字をそへておめかうといへるとぞ

㊅俳 頭よりも花の香多く會式かな　重方

十五日 △**下元**（げぐわん） 今日を下元といふ正月七月十五日中元の條にしるす

十五日 △**水官解厄**（すいくわんげやく） 今日水官人間に降て人の善悪を記し天帝に奏す

中亥 出雲 △**大社神事** △神あつめ△神あり 出雲國杵築村にあり祭神大己貴尊之祭の當日前より毎年風烈く浪あらき日也

其日龍蛇藻に乗て海上に浮びを取て曲物に盛て神殿に納むといへり其蛇蝮蛇に似て錢形の斑文あり尾先ハ魚に似てまなこなし

十六日 京都△聖一國師忌 東福寺の開山也建仁二年十月十五日生る弘安三年今日寂す

㊕ 通天の楓を愛や開山忌　之白

十八日 此日雞初てなく時湯あみすれバ長寿無病なり

廿日 不成就日 ○今日遠方へ出る事を忌む ○天龍寺佛國国師の忌日

廿日 △恵比須講 △誓文拂・此日商家一統におゐて祝ひ日として我家を饗ノ酒宴を催して客をもまねく中にも呉服店ハ格別にぎはしくする事ハ商人つね〴〵賣買の罪を拂ふとて誓文拂ともいふ京にて冠者社に詣で是を誓文がへしの社といふ大坂にハ今宮の戎へ参詣多し

㊕ 夷講酢賣に袴着せけり　芭蕉

十月の廿日ならでは佳女かな　巴桃

廿五日 ○今日人の病をとふ事なかれ ○南禅寺の一山忌 行状ハ博物筌にくはし

廿五日 京法勝寺大乗會○應仁の頃寺絶しより今ハ本尊薬師佛ハ東坂下西教寺にあり

廿八日 不成就日 △栂尾虫供養 栂尾寺明恵上人の開基也

晦日 △神迎

㊕ はるかに雲ゐちかよる迎　朝雪

之祠箒の手拂ひあり社迎　暮四

月令

日ふりくまれバ十月一ヶ月の雜事をしるす

△御取越 十月廿八日親鸞上人御忌日也正當日よりハ本願寺にて報恩講を修し一向宗の檀家に報恩講を勤むるハ當月取越て勤る故名づく

△茶の湯 △口切 三月に茶を摘五六月に壷へ詰てあたご山へ上し八九月に諸国へ出し十月にハ茶人茶壷の口を開く故口切といふ

ガラス使用

㊓口切に堺の庭ぞなつかしき　芭蕉

口切や褌のひぶふ線蘿蔔　其角

㊓口切の昔をあつぎて猶むかし　むかしくのを恋しちやくむかしや　芳室

△巨燵明（こたつあける）　△巨燵切る○巨燵とばかりいふハ三冬にわたるなり

時令

此部は十月の時候にかゝる事をあつむ

△初冬

十月三五日までをいふ又十月の異名にももちひ十月朔一日の事をいふなり

㊓夫木
冬きてハなきよひゞく初秋いつのまれ
かゝしく袖のさくわるらん　隆源

類題　初冬霰
冬やまよりか山はみやいそぐらん
正木のかつらちりまちるなり　範宗

家集　山家初冬
冬きぬとこのはをさそふ山風に
志ぐれがちなる庭ぞさびしき　俊光

㊓冬ハきたれり○まだ冬がれぬ○冬ざれ
初冬○河ならぬきほふ○冬の来て
○きのふたまちる泪の水○こほりて
○冬をむかふる○今朝よりふゆと
○きのふを秋と○今日を冬とや
○紅葉も霜とふる○冬ぞまちかねぬ

△初霜（はつしも）

△初霜降る○霜のつけ　凄しく冬の至るを記れ

㊓冬来てハ浅びもゝおぬ神無月の
としてれいろぞ風そよぐ之　家衡

㊓初霜の花もかゝりし重ね紀　宗祇

㊓初霜や取ふ縮の反ごうかり　支考

㊓初霜のおきたるとても朝食の
箸をおく間の程もないけし　立甫

△時雨（しぐれ）

△初時雨○しぐれの間ぞ季に
なるよげ液の欹涸の景ハ△印
あり○しぐれハあげくふられまちる
と附の気とうくハ附くるの意なる
時ぐハよりくみちよろくの義なり
○初時雨とハ十月ふなりてはじめて

ふる故に秋の末よりふるハ秋のしぐれといふぞ秋しぐれとハいへず。

霢雨（こさめ）と云ハ小雨の義にてあそし
ぐれよそあそてなるし

哥 拾遺（冬）かきくらし時雨るゝ空をながめつゝ
おもひこそやれかみなびの森　貫之

千載（冬）ねざめしてたれかきくらんこのころの
木の葉にかゝる夜半の時雨を　馬内侍

夫木（冬）神な月梢さへあらぬ雲まよふ
むしろ夕暮のそら　宗尊

碧玉　夜時雨
（冬）ふる音も雲ハまよひをとへしもや
時雨をも夜の枕とふかゝらん

雪玉　山時雨
（冬）みるま山はらしも見えず世を絶へて
時雨つきせる峯たかき雲

同　羇中時雨
（冬）旅まくらぬれて袖ほさぬ涙のうへを
ふる袖ほさぬまゝにふりてやん

柏玉　河時雨
（冬）されくる時雨や闇はなき川
かはなみも見え村しぐれかな

同　野時雨
（冬）そてらぬぐひさきをれ村しぐれ
秋よまちしても冬はなかりけれ

古今　袖時雨　躬恒
（冬）神無月時雨ふりぬるとみるまにも
まさるゝ人のたもとなりけり

玉葉　松風時雨　憲實
（冬）ふかくれし山の木の葉ハちりはてゝ
時雨をのこす峯のまつ風

同　泪時雨　公顯
（冬）もみぢ葉ぞ林のうへとふるとても
しぐれとふるハ泪なりけり

詞 △川音の時雨（川音も時雨にきこゆる也）△袖時雨なみだの袖にかゝるをいふ △小夜時雨（さハ付字にて夜のしぐれ也）△村時雨（ひとしきりつゝ降）てむらあるをいふ △小時雨（小の方よりそふるなる也）△行時雨（一方なれど一方ハふるといふ）△泪時雨（なみだをしぐれ）

△横時雨（風のまにまによこにふきくる）△夕時雨（夕ぐれにふるをいふ）△松風時雨（松風をしぐれの音にきゝなすをいふ）

△落葉時雨（おちしく葉の落る音をしぐれといふ）

○しぐれぞら。○しぐれの糸。○村しぐれ

（連）〽時雨ても照日まじはるしぐれかな　宗砌

〽雲ハ杉にかゝる世のしぐれかな　心敬

（俳）〽川音れ時雨くもり夜明哉　支考

〽初しぐれ猿も小蓑をほしげなり　芭蕉

△志満紀（時雨に風のまじはるをいふ委しくハ三冬の雪しまきの條にあり）

（俳）〽色くらく小傘持重し志まきかな　闇指

△木枯（こがらし）△凩（こがらし）風とも。木枯しの風と讀り（秋冬の風にて木をふき落す也）

或ハ秋冬にわたり俳にハ冬の季とす

（俳）〽木枯しの身ハ竹斎に似たる哉　芭蕉

（哥）千載〽[illegible]さまよへる木枯に[illegible]風のひゞきや[illegible]　定頼母

液雨（ゑきう）○唐閩中の俗立冬の後十日を入液とす液とハ[illegible]

初雪（はつゆき）△初雪まゐる△初雪の見参（げんざん）

○昔ハ初雪降れハ群臣参内せられしゆゑに見参といふ也

○浅雪ハ（初雪に同し）此外雪の事ハ三冬の部に出れ

（哥）拾遺〽都にてめづらしと見る初雪ハよしの山にふりやしぬらん　景時

新古今〽[illegible]　[illegible]上人

（詞）ふりそむる。ひらくある。初ふる雪。つもりもやらぬ。ふりまさる。新雪ぬ。[illegible]

（連）〽初雪ハ庭ハ花のちりもなし　宗祇

（俳）〽初雪にまくする人の妾ハ　其角

〽初雪や[illegible]　之道

〽初雪や浪のとゞかぬ岩の上　讀々

〽[illegible]傘の初雪見　如水

〽初雪や[illegible]谷の夕翅　紹巴

（詩）初雪詞

瓊林（ケイリン）瑤樹（ヨウジユ）忽（タチマチ）珊々（サンサン）急（ニハカニ）帯（オビテ）西風（セイフウ）下（クダル）

ガラス使用

晩天（ハンテン） タテノハヤシニタテノホカハヘタカト。オモフホドオモヒガケナウキラクスレバキウニ西風ニツレテハツユキガフツテキタノジヤ

柳絮（リウジヨ）三冬先北地 ヤナギノワタガ冬ノウチカラキタグニニハヤウチルカ

梅花一夜遍南枝 ムメノハナガヒトヨサノマニミナミノエダニサキソロウタカトオモヘバハツユキガフツタノデアラウ

△**初氷**（はつこほり） △初氷解は氷のとけ始しく 冬至十三日にあり

㊊ 千載 きのふこそ秋はくれしかいつのまにいはまの水のうすごほるらん 公實

㊍ 行水の一夜と成りや初氷 里隠

初氷を割ハしづまる松乃風 韓悪

㊋ 手の縁庭子ともみぢの二三枚 むまびとあつくる花もかくしの部 貞史

△**冬ざれ**（ふゆ） 冬ざれハ冬なしあれバといふ之 冬されハ物さびしくあらはれてみだ

△**冬籠**（ふゆごもり） 圏 冬ハ艸木もにて花も葉もなく籠り 地中にこもる虫をもいふ 又一説に冬になれバ家の内にこもりおることをもいふ也 季ハ三冬をかねし

㊊ 雪ふれバ冬ごもりせる艸も木も春にしられぬ花ぞ咲ける 貫之

ひまもなくちるもみぢ葉にうづもれて庭のけしきも冬ごもりけり 崇徳院御製

㊍ 金屏の松の古びや冬籠 芭蕉

武里八山我に方ふや冬ごもり 支考

屋うしながかまゐ仙人も冬ごもり 野水

冬籠いらへて吹る木の葉かな 鶴十

冬籠誰にも人にはあはぬなく 馬行

冬籠長崎何ぞぬ人となり 西鶴

△**冬搆**（ふゆがまへ） 冬がまへハ冬になりてまくをはり炉をひらくやうなる事をして寒をふせぐ支度をする心之

㊍ 冬構打はも梅のさがまへ 白扇

△**閉北窓**（きたまどをとづる） 北風ハはげしきりのゆへ北風をよけする支度之

草木

此部十月の艸木を集む圏と印するハ冬三月にも景物に用ひてよし

△名草枯（メイサウカル）　△葛かるゝ　△薊かるゝ　△荻かるゝ　△薄かるゝ

△蘭かるゝ　△女郎花かるゝ　△艸かるゝ

御傘にハ花の字結べハ秋之とあり

（俳）女郎花かれてもかつて附もあり　鬼貫

纏ふらちらしもたゆゝ葛かれ　言水

△冬椿（三冬）　△早咲椿　椿の花ハ春なれど冬に咲者を早咲と名て人賞翫といふ

△残菊　九月咲のこりたる菊なり

（哥）夫木

秋さける菊にハあれど神無月
しぐれに花の色ハ深ける　貫之

（狂）一とせの花のかぎりを終菊れ
千代の殺不どおりまさるよ　舊徳

（詩）残菊詞　唐大宗

細葉彫輕翠・團花飛碎黄・還將今歲色・復結後年芳

細カキ葉ガシボミナガラ青キイロアリハナノ下ハ咲タルモミダレ飛テ黄色ニミユルナリコトシハコレガナゴリナレドモ又来年コノイロヲモツテサケヨト心ニチギル

（詩）残菊五字對句　同上

闌珊陶令宅・寂莫費公房・
サキミダレタルトウエンメイガイヘ　モノサビシイ費長房ノウチ

晩彫霜凜冽・曉逐露離披・
日クレニハ花ガシボムトミレバシモガツヨクオイタ　明カタニテ、ミレバツユガハラハラトオイテアル

△冬牡丹　△寒牡丹　○十月ころ花さく十二月までもあり（大和本艸に出たり）

（哥）雪中牡丹

とくたちハきつむ雪も深くさく
九重なくも錦とてをかま　元政

（俳）重ね着にでも寒き冬牡丹　一菊

（狂）さむそうな形りに咲くる寒牡丹
花の風氣といふべかりけり　麥峯

△犬薹花　○石蕗とも書く　（俳）ちり完ふ書の笑さん犬薹の花　右山

（狂）口なしの色に咲しをいろよりて
徒ハの花とハいふにやあらん　為貞

△冬菊（三冬）　△寒菊　○多く花ハ一重にて葉てりて赤を賞くに　（異名）雪見艸

ガラス使用

○秋無艸（同上）○霜見艸（[illegible]）○のこり艸（藻塩）

○初見艸（蔵王ハ出されども初見艸／説多し寒艸の事ともいふ）

㊂哥　夫木　式子内親王

むらさきのうつろふやへのきくにまさ白きこうハたゞこらんゆるしら雪

蔵王　初見艸

しぐれふる霜ふくふしも初見草花咲よくりをわれやまたらん

㊂連　あさきてぬ菊さく谷の南かな　宗碩

㊂俳　あれにわき天寒の上に菊の枝　嵐雪

後敵のつよくみすゑやきその菊　梅翁

雪に菊やはのふ見せてかきてあり　五流

㊂狂　うちて後紅葉のいろハ志へそむるさるをおくるゝかん菊の花　嘉友

㊂詩　寒菊七字對句　詩礎

顏色却因風露染（ガンショクカヘツテヨリテフウロニソム）愁雪葉（ウレフユキハ）

（ハナノイロハケツクウニカゼヤツユデアカウツヽタ　雪ヲイヤガル葉）

穠華不畏雪霜欺（ヂウクワズオソレセツサウノアナドルヲ）傲霜枝（ゴウシモニエダ）

（ハナブサハユキヤシモノアナドルヲヲソレヌ　シモニヨハラヌエダ）

水仙花（すいせんのはな）千葉（せんえふ）あり單葉（ひとへ）あり一重あり物花白く花心（くわしん）黄く

㊂俳　水仙にあの月床し藤子紙　支考

水仙や一もと花と思ひけり　舊国

㊂狂　竹えの霜月心もかくやむかんつやまおおふふみ仙のそれ　計白

㊂詩　水仙七字對句　詩礎

臺盞元非千葉種（タイサンモトヨリセンヨウノタネニアラズ）付雲來（ツキテクモキタル）

（コノ水仙ノモトヘハ八ヘモトヨリセンヨウタネデハナイ）

丰容要是小蓮花（ホウヨウカナラズコレシヤウレンクワ）不染埃（ソメズチリ）

（コノハナノカタチハカナラズコレチイサイレンゲトミエル）

△八手（やつで）の花

葉の岐（またまた）七八あり形紅葉の葉に似て大ひなる姿あり

花白く小さくして黒實のなるなり

㊂俳　つくばひに八手の花や水あふり　荷風

妙薬

おこりをふるふ人此木の葉を六字の名號（みやうがう）をかきつけのおとくせんじて數杯（すはい）飲ハ志ぜんくしてさいそくく吐し悪ちおこりおつる

多く呑むをよしとせん。実を食ふべからず毒あり

△**茶の花** 白花く

俳 茶の花やもも香音の撞おし　支考

狂 花の香ハまふよ由ずらうん山吹のめしてぞあらさき葉の色でと　貞柳

△**山茶花** 南方艸木状ニ曰山茶花数種あり。○宝珠茶 ○石榴茶 ○海榴茶（花の中ニ碎花あり） ○躑躅茶 ○茉莉茶 ○宮粉茶 ○串珠茶 皆粉紅色とあり。葉ハ各同じうらバと云々。是ふよろづく見まごバ今茶人ありくの賞え数種のつむきたる。ぶし季寄ふある春の部ぶつむきしといへるハ海石榴之椿の字ふ紛るハ誤なり

俳 山茶花や吹をたくく竹尾　鬼貫

山茶花や茶のもひろう秋うらん　其角

狂 つぼきうもおもすじかくちでありりこも淺紅の山茶花のな　信面

帰花。狂花といふ（十月ふかへりさき）。ふたゝび咲。かへりざきの櫻

○櫻ハ山吹なとのるい此月二三さく事あり。まゝ多きときとあり。尋常の花とハかしけく賞せるにあらず

俳 幽灵もまねきくいひぬる　田井

暮れの人ともつゞくつりぬる　三惟

帰花故事 **雅櫻宮** 履中天皇三年冬十一月天皇池中に舟をうかべて皇妃とともに遊宴し膳臣酒を献る時櫻花杯中に落けり天皇これをあやしミ給ひ是花時ならぬにしていづれの所より来るやとて物部長真膽連に勅ありて其花の来る所を求めしめたまへば室山に得てたてまつる天皇其めづらしきをよろこびたまひて即宮の名を雅櫻と名付たまへり是かへり花之（日本紀に出たり）

ガラス使用

△寒梅 十月の季に入る俳書も有 十二月ともに委しく十二月に論著

△枇杷の花 白き花にて八月より咲 臘月までもある花也 葉ハ四季ともに散らず 実ハ五月なる之花の頃より実の熟するまでの間九十日ばかりある故自然とよく熟して味ひよし

㊥脱肛の厠に枇杷の花見るらむ　鬼貫

ふるされてたれも居せし枇杷の花　紹簾

㊥くものすにいとをかけてぞびはの花ばらちくと鳴る木がらし　遊野

△室の梅 △室咲 室の温氣をもつて早く未時花をさかしむ

㊥室をとおもて西室をなりぬのさき　李四

浮来の子花子の紅や室の梅　林雨

△榧の花 木を烟として蚊やりとする由 つゞめかやといふ 油をとる物ハいぬかややみて食べうらん小木まてよく実を結ぶ

㊥いつでぬよりぬく空に榧の花　立甫

山さう榧の花こんやあね乃朝　山川

△散紅葉 △紅葉散ロ紅葉散て物を染る事と御傘に出たり

㊢古今 此川にもみぢば流るおく山のゆきげの水ぞ今まさるらし

千載 秋 みなまづさまてもみぢ見えしかども紅葉ちりしく宇治川の宮　頼政

㊦錦着て月ちりくるひのころに紅葉ちり　肖柏

ちりちりに紅葉にふきかけるらんか　宗碩

㊥戸んと叩くもふに嵐のり夜紅葉　路外

夜の音せずて二枚をかさね紅葉　曲巴

㊧ふしきさればちりしく庭の上にてぞぬるでもみぢとゝろやはじまれ　貞柳

△麥蒔 漢土ハ秋種を下せども 本邦十月に下して四月黄熟れ是亦早中晩の異有。日本後紀 稱徳帝大臣吉備に勅ありて天下の百姓に大小の麥を種しむといへども其時をうしなひ

ガラス使用

て遂に不成（ならず）其後嵯峨帝弘仁十一年冬嗣公に勅ありて今より八月に蒔べしと是より時を不失といへり

俳 麦蒔やゐるに日ぐらし一人〻　朔平

△三冬 枯蘆（かれあし）

詩には寒蘆といふ

哥 新古今　西行
津の国の難波の春は夢なれや
あしの枯葉に風わたるなり

霜ふかくなりゆくころの難波江の
おとはまじらぬ芦の村立　成通

難波潟汀の芦ハ霜がれてなだの
捨舟あらはれにけり　二條院讃岐

詞 霜の下なる芦。風さむく。志をれ芦。うらぶれ芦。霜のかれ芦。霜におれふす

俳 ひまあれどさむくて人は昆陽の芦　鬼貫
秋おもや芦まれちかく浪つゝみ　文考

狂 草も木もさうふ衣すきたきゝの
枯ぎるおほしもかれ合ふなり　貞木

△三冬 枯柳（かれやなぎ） 枯柳ハ冬の柳と同じ。柳のかれたるも枯枝ともよめり

哥 萬葉 霜がれの冬の柳ハ見る人のかつらにすべくもえにけるかな

狂 きえぬれば茅ふハなし芽ぐみし枯柳
な人ひとつく立てねるかや　樂自

俳 浮ぬるて立や枯柳　五樓

△三冬 落葉（おちば） 諸木の葉風にちりゆくをいふ又木の葉ちるとも讀る

さるもいつ立田川よる流もせきてゝ
くろくるちりこぼれ枝ともいへり

詩 落葉七字對句

風林脱葉山容痩（カゼノハヤシニ葉ヲヌキテ山ノカタチヤセタリ）
霜稻登場野色寛（シモノイネバニノボリテ野ノイロヒロシ）
雪雲映月鱗々色（ユキグモツキニウツリテリンリンノイロ）
霜葉飛空慼々聲（シモノハソラニトンデセキセキノコヱ）

哥 秦ねそて一葉あられなるきさや山
中く風のまきおきてへ　和泉式部

連 神無月あらしの峯に木葉の暮 智蘊

ちくさも色くろみたる霜の葉に 宗砌

俳 一葉ちりいくらもちりて風もなし 嵐雪

かしいゝ衣や木の葉に削る角ある井 桃戸

狂 西風のさむい時分は枝一味をならかけ蔵までと見ゆる天ま寺 徳栄

△ 木の葉 三冬 △木葉舟△木葉衣。木の葉ハらぶけやまて木にある葉をもいへどそれハ和哥などにそへての事也俳の季ハ出にゝのいちり落る木々の葉をいふなり

木葉衣ハ木の葉を衣になぞらふる

又仙人など木の葉を衣とする故事あり

木葉舟ハ舟を一葉といへども立秋の條に一葉舟の故事あり考合すべし

△ 木の葉の雨 △木葉時雨 雨のふるごとく木葉のちるをいふ

詩 風吹枯木晴天雨 白氏文集

風か枯木ヲ吹バ晴タル空ガ雨ノフルヤウナ

連 さかくてちるも時雨の木の葉の秋 宗祇

俳 客ありと一葉も木葉の郭 芳室

狂 人なくて木の葉の雨のふるごとくハ境を八月のりのあくたくり 貞左

△ 朽葉 木の葉の地上に落てくちたるをいふまた枝に有ながら葉のくちたるをもいふ

哥 夫木 おしまれぬ朽葉ハ下れどもまりて紅葉に吹やる庭の木がらし 為相

俳 散もせで庭にきえたる朽葉哉 雉州

狂 ちるさるもなくて朽葉の口惜や口惜やくして紅葉もあり 舊徳

△ 蕪 三冬 又蕪菁ともいふ 俳 宙の寺根のあらハるゝかぶら哉 鬼貫

狂 あかくてもとみんれば世をでせをうとみんれバなら福で蕪くの夏 貞室

△ 大根 大根引 △おほね 葉ハ蕪に似て根大き故大根といふ 異名 蘿蔔

俳 子乙女が妻くみうゐり大根引 野坡

引にハさまかりぬる眺のあはれ 宗雄

△ 冬木の櫻 冬咲くはるもあり ゑくり咲の花ハあらで

△雪の下　（冊）花ハ四月ニ咲　鴨足艸と同物なれバ葉を冬も盛ん雪の下ニ名ふよつて季ニ定

△柊の花　（和名）ひゝらきハいらゝき　秘蔵ニ出　いらゝくハ苛ノ葉に刺有故也

生類　此部ニハ十月一ケ月の生類をあげ出せり

△鶯子啼　（俳）人の子れちらく奴よ　ムきゝはひゞる　湖中

（狂）笑るハさすが法花の守いゞらを子もよくなりしふ気ならしい夢　井魚

必用　此部ニハ十月一ケ月の天気の見やう其外必用の事をのせ

破軍向方

夜九ツ　巳ノ方	朝六ツ　辰ノ方	昼九ツ　未ノ方	暮六ツ　戌ノ方
夜八ツ　寅ノ方	朝五ツ　巳ノ方	昼八ツ　申ノ方	夜五ツ　亥ノ方
夜七ツ　卯ノ方	昼四ツ　午ノ方	昼七ツ　酉ノ方	夜四ツ　子ノ方

日刻　戌の日戌の刻亥の日亥の刻　事をなすに用ゐる事なかれ

出行作事　東方ニ向ひてよし　天道東より行月之

楽事　小春の長閑なるに面を北にして燦々る日光に脊をほらして暖和を得るハかの負暄黄綿襖子と昔の詞もむべなり　縄よ酒をあたゝめ獨酌あるひハ對客炉辺のまとゐに風寒をしのぎてハ春和のおもむきをうつす又枯枝に返り咲花のけしきをながむるあり

天氣　今月末よりの西風ハ午日もつゞきて大きにけふある物之　西北の風ハ日和をつゞくる紫乃雲ニてバ大風く戌亥の日雲あれバ風生じ○雹あれバ大風あり○今月ハ雨の後ニ風吹く東南の風ハ久しくらバ

占候　虹あれバ不作にて五穀貴し○初のきのへねにふれバその冬大ふ寒し○十五日晴なれバ冬大よあたゝかなり申の日寒

ガラス使用

ゞらざれバ暴死多し○東の雲たてバまたえひあり

養生

此月暖帽をいたゞく事なかれ脳を冷すべし眩暈の病なしみだりに針灸をなせバ血滋うて津液めぐらず座臥西方に向ふべしかならず房事をつゝしむ事をもつぱらとすれバ

衣服式

當月より綿入を着るべし○移菊　表紫　裏青　○黄紅葉　表黄　裏蘇芳

生花式正

○残菊○茶花○寒葵○隈笹○霜ふり五葉○寒竹○かしま松○唐松○大山擬○つハの花○ゆづり葉

○此月紅粉の仕やう○梨みそたくはへやう○香の物漬やう秘傳うどく。○梔子○木芙蓉うへやう種蒔の品々其外當月用意の品并ニ養生の仕やう等委しくハ日本歳時記○知術全書等ニ出故略之

十月飲食並料理献立

禁物

山椒を多く食へバ血脈を破る○ふらな食へバ瀉多く出る○霜に枯たる菜を食へバ面のいろを損ずるなり

好物

今月羊を食して益あり

○雀肉　冬三月これを食へバ陽道をおこし人をして子あらしむるなり

料理

汁　まくらな　焼ふけ

かき　せり

とり身　つぶしいたけ　小まめる

小花えび　きくらげ　ゆノ皮

あひる　生しいたけ　さゝごぼう

やうたかん　きくな　ふきのとう

やきぶな　せうが

清汁　きんこ　焼松たけ　こせう

かしわ　牛房さゝがき　せうが

膾　鯛・せんまる　大こん・くり　せうが

きそで・あをまて　大こん・せうが　くり・きんかん

ぶな細つくり
うど
本わさび　いり酒

ぼらひら作り
きりぐり
岩たけ　ちよろぎそへて

白うを・うどめ
岩たけ
梅肉立いり酒

なまこ　糸きり
本わさげ
せり　せうがそへ

差味（さしみ）

かれい・鯛・ゑがつを
あげそちよく　いり酒

ゑびきくらげ
本わさげ
きんかん

たつかい・むしき
せり・きんかん

鮒・岩たけ
きうりぐり
いり酒

かをき水とまぜて
大こん・いわたけ
わさびそへ

煮物（にもの）

鴨・まいたけ
とうふ

鴈
ひらたけ
ねぶか

あまうり
椎たけ・こんにやく
うすくず　由

あたゝき
ぎんなん・本わさげ
くずたまり

きんこ　細づくり
きすご　ひらき
ゆりね　くずたまり

おのしろ　せうし
そうめんかたもち
しめじそへ

和會物（あへもの）

ぼうだら　さにしそ
せんぼう
そうかしこそ

さより・うど
きんせうそへ

いせゑび・岩たけ
ねぬなは
そへ

たこ　さんぼう
本わさげ
まきびそへ

くしがい
ぎんなん
まさかく

吸物（すいもの）

ますて
おこぜ

しいたけ
きくな
ほうれんさう

あまのり・葛せん豆腐
わらび　きうり

鴨　せり
ゑんまう

かしわ　あけまき
きうり椎茸
せうが

もう茶
あまびらうす
ねぎ小口

精進

汁（しる）

ちく筍　ぜうろ
ちう
そうきさま

多みうど
岩たけ

栗付かつり
汁ぶ椎たけ

長いもきん
こゝろ

あげふまめ
ゆうろう

大こん小角
おぼろすん

やきふ
らさ

わり
ゆが

清汁（すまし）

ゆりね
わさび

小かぶおし
のりたくみ

実くるみ
みる

松露
ぶん豆腐

志めじ
とせんどう
のり

膾（なます）

大こん・かんぴよう
あげふ・岩たけ
くり・せうが

ろうべくきさ
さかうかん
ゆきそ

特1
2961

くらんまい・きくな
なけさん・やくみまわ

ますいも
椎たけ
きり栗

差味（さしみ）
ぎおんぼう
きてふかき
木くらげ

きり栗
せんぼう
ゆで

煮物（にもの）
焼ふ
まさび

浅菜竹のこ
ひらたけ・よめな
さめくけ

よせぐさん
椎くらげ
せり

和會物（あへもの）
まるし
ごまあへ

くり・うど
柿のみあへ

うど
こんにやく
まるあへ

黒さけぎくな
にんじん
ごまあへ

吸物（すいもの）
わしかけ
うずら
まるか

よせぎんなん
やきどり
こしやう

時物

魚
うなぎ・かれい・かます・たら
さより・うづら・きすご

青物（あをもの）
かぶら・大こん・にんじん
ねぶか・せり・くわゐ

きんかん・こさきび・牛房・めうど
ふきのたう・ゆ・ざくろ

防風・さつまいも
ぎんなん・ぎおんぼう

ガラス使用

ガラス使用